

古事類苑

植物部六

木五

〔倭名類聚抄二十〕櫻 文字集略云、櫻名佐久良反、和子大如柏、端有赤白黑者也。

〔箋注倭名類聚抄木〕本居氏曰、佐久良、開光映之轉、謂是花開有光映勝他木也。也良通韻、○中玉篇、櫻、含桃也。上林賦、櫻桃也。又有拾字云、今謂之櫻桃也。亦作含廣韻亦云、櫻含桃、然則櫻卽櫻桃、櫻桃以鶲所含得名、故非櫻桃外別有單呼櫻者、源君分條兩載、非是。按加婆佐久良、當是山櫻桃、佐久良亦山櫻桃之一種、但濃華艷麗、非加婆佐久良之比、是樹西土所無、故無別漢名之可充也。

〔書言字考節用集六生植〕サクラ櫻支那以牡丹爲花王、日本以櫻爲花王、故國俗止呼櫻而已、又本朝賞櫻權興于履中帝稚櫻宮

〔倭訓栞前編十〕さくら 櫻をかりてよめり、沈休文詩に、山櫻發欲然、註に果木名、朱色如火然也と見え、王荊公詩に、山櫻抱石映松枝、司馬溫公詩に、紅櫻零落杏花開と見えたるは別品なるべし。神代紀に、木ノ花開耶姫ありて、伊勢朝熊の神社に、櫻樹を其靈とせし事、古記に見えて、櫻宮とも稱せり、西行の歌あり、神名秘書の苔虫神も、櫻大刀自の神體形石に坐り、苔生たるをいへり、思圓上人文永十年の記に、小朝熊の宮の坤の方隅にそびえたる巖ありて、其上に櫻木あり、高さ三尺ばかり、此木往古已來かれず、是櫻大刀自命の神體也と見え、一宮記に、駿河の淺間も木花開耶姫とす、富士も同じ、伊勢朝明郡に布自神社、櫻神社相並び、甲斐國の金櫻神社もまた此神を祭れり、さればさくらは開耶の轉せるなりといへり、或は咲簇るの訓義とす、きむ反く也、花木の中にも、開み